

平成29年度第3回北杜市子ども読書推進計画策定委員会会議録

- (1) 会議名：平成29年度第3回北杜市子ども読書推進計画策定委員会
- (2) 開催日時：平成30年1月18日（木）午後2時～午後4時
- (3) 開催場所：金田一春彦記念図書館 ことばの資料館
- (4) 出席者：策定委員 溝口 たみ子／松村 雅子／柴山 裕子／佐野 恭子／横森 勝
高橋 達郎／田中 和美／浅川 希久子／加藤 寿
教育委員会 井出 良司（教育部長）
事務局 坂本 あけみ（図書館長）／深澤 寛美・小野 まどか・相吉 悠（総務担当）
- (5) 議題： 1) 「北杜市子ども読書活動推進計画（第三次）」の内容検討
2) その他
- (6) 公開・非公開の別：公開
- (7) 該当なし
- (8) 傍聴人の数：0人
- (9) 審議内容

議 題

- 1) 「北杜市子ども読書活動推進計画（第三次）」の内容検討
*事務局より資料をもとに前回の計画案と変更した点について説明。

第1章 第三次計画策定の背景 について

1. 子どもたちの置かれている環境

事務局：第三段落目に、子どもたちが置かれている環境に対して今後どのような対策を立てていけばいいかを追記した。

第2章 第二次計画における取組・成果及び課題 について

事務局：全体的に、「公共図書館」と「図書館」の表現が混在して曖昧になっていたため、市立図書館を指す場合は「市立図書館」という表記に統一した。

1 家庭における取組・成果及び課題

(1) 取組

事務局：「(2) 成果と課題」の中で読み聞かせについても触れているので、「○読み聞かせ」の表題を追記した。

(2) 成果と課題

事務局：前回までの計画案では、「平成29年度子ども読書活動アンケート調査」と「推進状況調査」を盛り込んだ内容にしていたが、色々なアンケート調査の名称が出てきてわかりづらいという意見をいただいたので、「平成29年度子ども読書活動アンケート調査」のみの数値を引用し、「(以下、「アンケート調査」)」という表記に統一した。また、「○読み聞かせ」の成果と課題の中に記載されていたブックスタート事業についての内容を「○ブックスタート事業」の成果と課題へ移行した。ブックスタート事業の認知状況の年度比較をした棒グラフを追加した。

4 学校における取組・成果及び課題

(2) 成果と課題

事務局：一斉読書（朝読を含む）に取り組んでいる学校数について、市・県・全国を比較した表とグラフを追加した。また、家読の推進状況についてのグラフも追加した。「○市立図書館との連携」の中に、前回、学校図書館司書の先生から指摘をいただいた図書館同士のネットワークの整備に関する内容を追記した。

5 市立図書館における取組・成果及び課題

(2) 成果と課題

事務局：「○おすすめ本の展示やリストの配布」と「○やまね便りの発行」について追記した。また、前回までは本の杜への招待状事業の成果と課題に含まれていた内容を「○図書館見学、職場体験等の受入れ」として個別に抜き出して追記した。また、障害のある子どもに対しての支援だけでなく、外国籍の子どもへの読書活動支援の充実も必要という意見を受け、「○障害のある子どもや外国籍の子どもの読書活動支援」と表題を変えて、内容も追記した。障害のある子どもへの支援ができていないとしていたが、資料の収集はしているので、「一部資料の収集にとどまっている」という表現に変えた。

第3章 第三次計画の基本的な考え方 について

1 基本的な考え方

事務局：国、山梨県、北杜市の取組について分けて記載してはどうかとの意見を受け、そのように変えた。国で「子どもの読書活動の推進に関する法律」が制定された後、県が「山梨子ども読書活動推進実施計画」を策定したという経緯や、それらを受けて北杜市が考える基本的な推進体制や取組方針を記述した。

第4章 具体的な方策 について

3 市立図書館等における子どもの読書活動の推進

事務局：新たに「○日本語を母国語としない子どもへの読書活動の支援」、「○地域住民への、「家読」等子ども読書活動推進事業の周知・理解の促進」、「○関係機関との連携」の3件を追加した。

第5章 計画の推進に向けて について

事務局：前回までは「第4章 具体的な方策」の最後に盛り込んでいた数値目標を、第5章として個別に章立てをした。目標を示した表に「推進機関」の欄を追加し、指標達成を主導する部署名を具体的に記入した。図書館だけではなく、関係機関がそれぞれに関わって読書活動を推進していくということがわかる目標設定の表にした。

前回までの指標では、「公共図書館の非利用率（ほとんど利用しない人の割合）」を下げるという目標を掲げていたが、肯定的な表現に変えて数値を上げる表現のほうが望ましいという意見をいただいたので、「市立図書館を利用する児童・生徒の割合」を上げるという目標に置き換えた。

委員：前回よりも非常によくまとまっていると思う。特に第3章で、国と県と市の三段階に分けて説明されたことによって、何が目的で市がこのような計画を立てているかが明確になった。また、今まではみんなで協力して取り組んでいくことを漠然としか理解していなかったが、数値目標に推進機関が明記されたことによって、はっきりわかるようになった。

委員：数値目標を見ると、読書活動を全体的に少しずつ底上げするという印象を受けたが、これらを目標に掲げた根拠はあるのか。

会長：子どもたちの人口は減っていくが、目標の数値が高いという気がする。

事務局：全体的に、平成34年度の時点では現在より2～3%上げることを目標に掲げた。県の数値目標を参考にしながら、市で目標達成できる数値として提案した。結果を1%上げるために必要な実際の人数は、換算すると結構な人数になる。2～3%上げることは見た目には低い目標に思うかもしれないが、実際には高い目標であると考えている。社会的な環境の変化により、読書率は全体的に下がっている。電子媒体が普及したり、学校図書館と公共図書館とのネットワークによって公共図書館の本を学校で利用できたり、保育園へも団体貸出や出張おはなし会をしたり、家庭においても少子化の影響でお孫さんに絵本をプレゼントしたり、お子さんに本を購入しているため、公共図書館に直接足を運ばなくても読書ができる状況である。そのような環境下で、市立図書館の利用促進

を1%上げることは大変な目標だと感じている。そのため、このような数値目標を立てた。

会 長：人口の増減に合わせたパーセンテージではなく、平成29年度に合わせたパーセンテージなので、ブックスタートで配布した本の読書率向上などは無理のない目標設定だと思う。

事務局：目標を達成したから終わり、目標に達成してないから一生懸命やらなきゃというよりも、数字に惑わされたり踊らされたりすることなく根気よく取り組むべきだと思う。無理のない数値を上げて、その数値を目指して取り組み、その結果数値を上回ったら良いという気持ちでいいのではないかな。

会 長：こちらの努力も大事だがその年に出版された本の出来高も影響する。数値目標については、これで了承ということではいいかな。

委 員：「本の杜への招待状事業における絵本引換率」をもう少し上げてほしい。予算を使っている事業なので、5年後には50%までには持ち上げてほしい。

事務局：現在の引換率は約3割にとどまっている。こちらでも周知をしているが、まだまだ周知方法を広げる必要があるとは感じている。

委 員：もう少し上げることはできないか。

部 長：アンケートの回収率に対しての割合なので、人口の増減は目標の数値に影響はない。目標なので、低くても高すぎても意味がない。場合によっては達成できない指標もあるかもしれないが、それは反省材料になる。達成できることだけを重視せず、かといって高すぎる目標は負担であったり目に見える数字としては適当でなかったりするので、適当な目標を議論していただきたい。

事務局：目標を引き上げたほうがいいのか。

委 員：第二次計画のときは数値目標の設定がなかったので、第三次計画はこの数値で検証してみてはどうか。

部 長：学校の現場に関わっている委員としては、どのくらいの数値目標を掲げるのが良いと思うか。小学生から中学生になるにつれて読書率や図書館の利用率が下がっている傾向が見受けられている中、今の数値目標は、小学生と中学生の数値を同じだけ向上させるような目標になっている。小学校の段階で数値を上げておかないと、中学校の数値も上がってこないことになる。

委 員：平成30年から5年間の計画を策定しているわけだが、中間結果を評価するための委員会などの予定はあるのか。

事務局：今のところ委員会を開く予定はない。毎年度末に進捗状況調査はしているが、今回定めた指標の数値が取れるほどの詳細な調査はしていない。今回のアンケート集計には膨大な時間がかかったため、毎年このようなアンケート調査ができるかどうか即答はできないが、数値目標に対してのみのアンケート調査が可能かどうか検討してみる。

部長：小中学校においては、全国学力学習調査というものがある。その中の生活状況調査において、図書館の利用や一日にどのくらい本を読むかといった設問があるので、参考になる数値は取ることができる。

委員：高等学校の生徒は市外から通っている子も多いので、高校生が市立図書館を利用する割合数値を上げるのはかなり厳しいと思う。受験勉強やクラブ活動で忙しい時期でもある。それから、本は紙媒体だけでなく、電子媒体の利用をしている人も多くなっている。“本”の定義を変えなければならないのではないか。

事務局：市の図書館では電子書籍の貸出システムを導入していないが、個人で利用している方は確かにいると思う。指摘のとおり数値に反映できていない読書率があるかもしれない。また、高校の場合は市立の甲陵高校を除いた私立高校に市立図書館が読書推進を呼びかけるのは難しいため、どのような方策で高校生に呼びかけていけばいいのかは課題である。例えば図書館資料の充実や学習環境の整備が必要かと思うが、予算的な面で修理費や改修費など設備への投資はできないので、現状の中で足を運んでもらう工夫が必要と考えている。

委員：“図書館の利用”を貸出数だけでなく、勉強に使うことも含めてアンケートをとれば利用率も上がってくるのではないか。ながさか図書館は、学生がよく利用している。

事務局：アンケートの設問は、「市の図書館をどれくらい利用しますか」としているので、学習での利用も集計には反映されている。

委員：市内の子でも市外の駅を利用している子もいる。例えば蕪崎市の学校に通う子は蕪崎駅近くの図書館を利用したり、甲府市に通う子は甲府駅最寄りの図書館を利用したりしているはずである。“市立図書館の利用”となると限定されている気がする。

事務局：アンケートでの表現は「市の図書館」という表現をした。第四次にアンケートをとるときには指標が達成されているかどうか明確にわかる文言にしたほうが良いと思うが、市外の図書館の利用も含めても良いかどうかは難しいところである。

委員：平成29年度から平成34年度にかけて達成目標を見ると、保育園は2.9%アップ、小学校は1.4%アップ、中学校では1.6%アップのように差がついているが、これには理由があるのか。5年間の推進計画を実施するにあたって、目的は子どもの読書活動が飽和的に遂行されるための計画である。一番力を入れたいところの目標数値を高くもっていき、全体を高めていくことが必要ではないかと思うがいかがか。

事務局：図書館だけでこの目標を達成することは難しいので、各関係機関に協力をいただき、全体で取り組む姿勢に力を入れていけば高い目標を掲げられるのではないかと思う。

部長：そういった意味で、今回の委員を選出させていただく際には生涯学習課や子育て応援課、教育総務課、施策的に取り組んでいける部局を巻き込んだ。関係機関が協力できる体制で、子ども読書を推進して行きたい。四捨五入的に5%単位にして数字を綺麗に見せる目標づくりや、全てを一律の割合で上げるなど様々な方法がある。目標によって達成の難易度も異なり、事務局だけで決定できる話ではないので、それぞれの立場で意見をいただきたい。

会長：日本の出版界や本屋も大きく変わろうとしている。電子書籍が0円から読めて、若者にとっても有難いことである。「読書推進」が「もっとみんなに本を読んでもらいたい」ということを大事に考えるのであれば、「図書館を大事にする」と考えるのではなく「本を大事にする」と考えるべきではないか。そうして、次のアンケートでは電子書籍も本に含めて読書ととらえれば、面白い結果が出ると思う。冒頭にあったように、パーセンテージが全ての評価ではないということには同感である。高校生はほとんど本を買わなくなったが、電子書籍で読んだものを紙で見たくなり、図書館を訪れるということが都会では見え始めている。小学校に上がる前や小学校では、kindleの使い方を図書館で教えているところもある。活字に親しむということを目標に持ち、出来る限り良い本を子どもたちにセレクトしていくと良いと感じる。

事務局：保育園対象のどのくらい本を読むかという割合については、平成24年度のアンケートの結果より平成29年度の結果が5%低下していた。今の目標設定だと平成30年度には2.9%引き上げるとしているが、マイナス5%を考慮すると、甘くない目標だと感じているので、電子書籍を読んでいる人口を含めばもう少し数値が上がるとは解釈している。

委員：全体を見たときに、保育園児の時期と本の杜への招待状事業が、特に力を入れて取り組む事柄なのではないかと感じた。計画の中で、特に力を入れるべきところには、それがわかるような文言を入れるとわかりやすいのではないかと思う。

部長：「読書の推進」という意味で、どんな媒体であれ子どもたちに読書をしていただくことが一番の目的である。そこから考えると、パーセンテージの設定以前に、「月に1回以上図書館を利用する割合」を伸ばすという指標自体が適切かどうかという前提に戻って議論していただければと思う。市立図書館の利用促進自体を否定しているわけではなく、「読書推進」において市立図書館の利用だけに視点を置くことが計画全体の指標として適切かどうかと考える必要があると感じた。

会長：プライベート図書館を経営している立場としては、図書館が博物館化されることだけは避けたいと思っている。ブックスタートから始まって、子育て支援、小学生低学年の時期にどれだけ読書推進の努力をしたかによって、その後が変

わってくると思う。正直、中学生や高校から力を入れても難しい。ブックスタートに配布した本や図書館にある本をいかに手に取っていただけるかが大事である。

部長：この計画は「図書館」の利用促進計画ではなく子どもの「読書」を推進するものである。図書館の利用はもちろん大事だと思っているが、指標として適切かどうかということである。

委員：私たち委員は計画の「策定」委員なのであって「推進」委員ではないので、計画を良いものにすることが大事であり、この計画に基づいて推進していくのは担当機関である。推進の細かい部分にとらわれてしまうと計画自体が棚に上がってしまう感じがした。協議会委員としてこの策定委員会に参加している立場から言えば、本の杜への招待状事業の絵本の引換率をもっとあげる努力をするべきだと思う。市の予算を使っている事業として、消極的な目標ではなく最低限でも50%を目指していただきたい。

事務局：計画が運用されてから実際にどう取り組んでいくかは、それぞれの機関にゆだねることになる。指標が正しいかどうかの検証も必要だが、計画としてどうか視点をおいて考えていただきたい。

委員：数値目標を5章として独立させ、強調しているのであれば委員も考える必要があると思うが、確かに細かい部分にこだわっていても仕方がないとも思った。ただ、保育園の時期の目標をレベルアップすると同時に、ブックスタート事業や本の杜への招待状事業に5年間力を入れていこうということが見えるような計画だと良いと思った。

部長：指標の並び替えをしてみればいいのか。図書館が作成した計画なので図書館関係が一番下に記載されているが、対象年齢を意識してブックスタート事業から始まり、2歳児を対象にした本の杜への招待状事業、それを受けて家で本を読む割合はこのくらいを目指す、それを受けて小学校、中学校、高校はこのくらい目指すというように、縦の流れを意識して組み替えてはどうか。

委員：その方が良い。

委員：保育園の年長くらいになれば自分で本を手に取って読むようになるが、保育園対象のアンケートには保護者と一緒に読むということに関してしか調査していない。今後は「お子さんが1週間のうちにどのくらい本を手に取りますか」というような質問を設ければ、親が関わらなくても子ども自身が本に関わった部分も数値結果に出てくると思う。

委員：ブックスタート事業や本の杜への招待状事業の対象となる年齢の子どもの読書には、必ず保護者が介在する。保護者が子どもに本に関わる時間を作ってあげる努力をするような働きかけをすれば、本の杜事業に関する結果も伸びてくるのではないか。

事務局：絵本の引換率が伸びない理由として、保護者の都合とおはなし会の日程が合わないという意見が多い。そこを改善するような工夫をすれば、絵本の引換率も伸びてくるとは思う。配本だけが目的であれば図書館以外の場所で引換えすることも考えられるが、図書館のおはなし会に来てもらうことが第一の目的であるため、引換率の向上には頭を悩ませている。保育園には保護者の出入りが多いので、そこで周知を図ることが大切と考えている。おはなし会の参加人数は年々増えているが、毎回同じ親子が参加することが多い。

委員：引換率50%の達成は難しいとは思いますが、伸びる可能性はある。

事務局：方法を模索しながら取り組む。

委員：趣旨が図書館に来てほしいということであれば、おはなし会に都合がつかなければ図書館に来るだけでもいいのか。

事務局：前提はおはなし会への参加だが、都合が合わない場合はそれも可としている。その場合は、図書館内の案内をしている。

委員：数値目標を上げるのであればおはなし会への参加という趣旨を緩和するか、趣旨は変えないなら数値目標はこのままにするかのどちらの方向性にするかと思う。

委員：今年のアンケートの時に保育園児だった子が5年後には小学校に上がっているので、小学校の数値目標を高くしておくのは良いと思う。それから、高校生は図書館に読書ではなく勉強に来る子が多いので、「読書の推進」という意味においては、図書館を利用する児童・生徒の割合を指標に載せてもあまり意味がないと思う。なるべく幼少期の読書推進を手厚くして目標を高くしたらいいのではないか。

部長：電子媒体の普及もある中で図書館の利用だけが読書推進とは言えないという意見をふまえて、図書館の利用率については、参考数値として読書の推進とは切り離して考える。ただ、図書館の計画として完全に指標から無くすわけにはいかないと考えてるので、指標の一番下に載せる。

委員：「月1回」と聞くことに意味があるのかとも思うし、図書館の利用を「市立図書館」に限定する必要もない。市外の図書館や学校図書館も含めて、「図書館の利用」という表現してもっと簡潔にしてはどうか。

部長：“市”を削除して、公立図書館や学校図書館、電子媒体も広い意味では図書館的な機能として捉えて“図書館の利用”とし、設問を変える。

事務局：次回のアンケートから設問を変えると、今回のアンケート結果との数値との比較ができないが、次回と次々回の数値を比較するという事でよろしいか。

委員：良い。

部長：数値目標は、ブックスタートで配布した本の読書率を100%とする。本の杜への招待状事業に関わっている委員や幼少期に力を入れた方がいいという全体的

な意見、図書館の工夫によって、本の杜への招待状事業における絵本の引換率の目標は40%から50%まで上げる。その結果、保育園児においては51%を60%に上げる、小学校は86.6%を90%に、中学校は80%にするといったように、低年齢層の読書率を上げ、その波及効果として引き続き小学校・中学校でも数値を上げていこうという努力目標を掲げる方向性でよいか。

委員：中学生は76%のままでよいのでは。

委員：数値目標の方向性には賛成。

部長：述べた数値は参考なので、事務局が改めて目標設定したものを委員に送付する。

事務局：本日の指摘を反映させたものを次回の委員までにお送りする。

委員：委員に関わったからこそ、この計画を承知できた。これだけの計画を市民や関係者に周知していく必要性から、第3次計画の内容のダイジェスト版のようなものを作る予定はあるか。

事務局：考えていなかったが、こういう取組をしているということをみんなに知ってもらわなければ意味がないとは強く思っている。言葉では地域全体で読書を進めていくとはいいいながら、時代の流れは逆行している。だからこそ、地域で取組みたいということが伝わるのかと思案していたので、ダイジェスト版という形で周知するという方法は適切に思う。

委員：誰にでもサッとわかりやすいものを、紙ベースや他の媒体でたくさんの方に周知できると素晴らしいと思う。できれば、第4回のときにダイジェスト版の案を出していただき、全員で検討し、教育委員会にも計画とダイジェスト版の両方を提案した方がより良いと思う。

事務局：承知した。

委員：具体的な方策の図書館の部分に、子連れで利用しやすい環境整備という項目が入ってもいいのではないか。図書館に行かない理由として、子どもが騒いだりして迷惑をかけてしまうからといった回答が多い。取組としては、そのような内容の記述があってもいいのではないかと思う。

部長：長坂コミュニティステーションの中に図書館を作ったときのコンセプトは、「子ども図書館」だった。少しざわざわしても、子どもたちが立ち寄りやすい図書館を作るというのが目的だった。当時は「子どもコーナー」としてスタートしたが、合併して市になり「ながさか図書館」として再スタートしてからは“静かに”という雰囲気変わったことは確かである。小さい子どもたちが利用するスペースには絨毯やカーペットが敷かれたりして寄りやすいようになっているが、保護者の方にとっては抵抗があることは伝わってくる。かといって、そこだけを追求してしまうと、静かに読書したい人や勉強したい学生たちにとつ

てはマイナスになり、相思相愛は難しい。運営の方向性については、図書館協議会で議論していくことが望ましい。

委員：8つの図書館の設備に格差がある。その点を考慮して、環境整備ということに記載してもいいのではないか。金田一春彦記念図書館も以前は独立した子ども図書室と大人の図書室で分れていたが、併設の児童館の都合で一緒になった。一緒になってからは、子どものスペースを利用しているところをあまり見たことがなく、大人のスペースが削られて少なくなったので、施設の整備は考えていったほうがいいのではと思う。

部長：子どもが利用しやすい図書館を目指すという趣旨は承知しているが、読書推進の計画であるので、図書館のあり方や施設の整備については別の場でしっかり議論する時期が来る。

委員：子どもが利用しやすい施設ということを考えるのは必要ではないか。

委員：ライブラリーはくしゅうには、図書館とは別にプレイルームという独立した部屋がある。テレビやおもちゃ、少し座れる段差などがあり、そこで図書館の職員がおはなし会をしている。おはなし会が終われば、子どもたちが自由に遊んだり、お母さんが本を読んであげたりしている。どこの図書館にもそのようなスペースがあればいいなと思う。

部長：環境整備の話が大事だと心得ているが、施設整備の話を広げていくと取り留めの無い計画に肥大化してしまう。子どもたちが読書好きになるにはどうすればいいかというところで話をまとめてほしい。環境整備に関する文言が全くないわけではなく、広い意味で「よりよい子どもの読書環境整備に努めていきます」と記述している。

委員：言いたいことの意味は理解しているが、一人では図書館に来られない小さな子どもは親が連れて来るため、子連れが利用しやすい図書館を目指すことも大切だということである。図書館は静かなところだけである必要はなく、コミュニティの場だとも思っているため、親御さんたちが気軽に来られる場所になれば良いと思う。

部長：各部門でそれぞれに推進の取り組みをしていこうという計画に沿って、その点に関しては間違いなく公立図書館が担うことになるので、ご理解いただきたい。

委員：「〇関係機関との連携」の文言の最後に、「並びに環境整備の充実」というような表現での記載を検討してはどうか。

事務局：承知した。

委員：第二次計画のときにも策定に関わったが、その時は2年間の任期でお願いされた。1年目は策定、2年目は検証ということで頼まれたが、翌年は委員が集まらないといった様々な理由があり、実質は検証のために集まれずに終わって、

そのまま5年間が経った。こうしてみんなで熱心に考えた計画を教育委員会として出すのであれば、教育委員会が主導になってこの計画を推進していくためにどうすればいいかを具体的に話し合える方法を考えてほしい。会議ばかりをやればいいということではないが、第二次計画はあまり浸透されていないという現状や呼びかけているところをあまり見たことがない。

部長：今年度の委嘱は計画が策定されるまでの期間として平成30年3月31日までとなっている。要項においても、策定するための委員会であるため計画の策定をもって終了という内容になっている。検証の場についてはみなさんから意見を聞きながら、要項とは別の部分で今後教育委員会や事務局で考えていく必要がある。毎年検証と関係機関が情報交換をしながら進めていくことは重要だと思うので、検討する余地がある。

委員：策定委員のメンバーが継続して検証するというのではなく、検証のための組織を検討してほしい。

部長：要項の改正をすれば可能。行政機関としては要項に基づいて進めていくので、本日の時点では引き続きお願いするという約束はできないが、事務局である教育委員会や中央図書館で検討し、必要があれば要項を改正しながら、新たに委嘱をさせていただく。

会長：子どもの本に関わる大人として、計画を紙面にまとめて終わるのではなくその後の努力をしていくところまで見届けたいと思う。

委員：事務局は要項に沿って行っているので、この場では結論が出ることはない。

委員：北杜市で立てた計画を監視していくのが市民なので、市民にしっかり計画を周知しながらみんなで考えて意見を言っていくということで良いと思う。

委員：パブリックコメントは考えているのか。

事務局：近隣市町村でも実施していなかったもので、考えていない。色々な立場の方に策定委員に加わっていただいているので、各関係機関において周知をしていただきたいと考えている。

部長：市でパブリックコメントに関する実施要綱があり、広く市民のサービスに通じる計画を策定する場合が対象になっている。事前に所管の総務課とも相談したところ、保護者が関わるとはいえ主な対象が子どもという限られた割合であるため、必要はないという判断であった。県内の他の自治体でも前例がなかったため、委員会でしっかり議論していただき策定する。

委員：第4章の具体的な方策の学校の部分で、各学校それぞれにこれまでの取り組みや今後計画していることもあり、これだけの文言だと言葉足らずな部分があるので、図書館に携わっている先生たちに意見を聞きながら考えた文言を送って

もよいか。

事務局：ぜひお願いしたい。

2) その他

事務局：アンケートの結果をまとめたグラフについて、いくつかグラフの種類を例に出し、見やすいものに決定するという話があった。どれがよいか。

委員：帯グラフが良い。

委員：年度の比較は、平成24年度が先で平成29年度が後の方がわかりやすいのではないか。

事務局：承知した。

その他

○今後のスケジュール

当初は2月の定例教育委員会で承認を経て3月に告示を考えていたが、3月の定例教育委員会で承認を経て速やかに告示するようにスケジュールを変更。

以上